2019年6月22日　第一版
2019年7月3日　第二版
2019年12月26日　第三版
2020年1月7日　第四版

HCAP
Harvard College in Asia Program

HCAP東京大学運営委員会13期

東京カンファレンス2019 報告書

本報告書について

本報告書は HCAP (Harvard College in Asia Program) 東京大学運営委員会13期が企画・運営した、「東京カンファレンス 2019」について報告することを目的としたものである。

目次

03 0. 代表挨拶
04 1. HCAPとは
04 2. HCAP 東京カンファレンス2019 協賛・協力
06 3. プログラム詳細報告
06 3-1. 貿易ゲーム
07 3-2. 東大生・ハーバード生交流企画
09 3-3. たこ焼きパーティー
10 3-4. お笑い企画
11 3-5. 茶道デモンストレーション
13 3-6. 高校生交流企画
15 3-7. アイデアソン企画
17 3-8. 英語教育企画
19 3-9. 漫画企画
20 4. HCAP東京カンファレンス2019 総括
22 5. HCAP東京カンファレンス2019 会計報告

HCAP TOKYO

0.代表挨拶

2019年3月16日から24日にかけ、HCAP東京大学運営委員会13期（以下、13期）はHCAP東京カンファレンス2019を開催致しました。今年度もつつながなくカンファレンスを終えることができましたのは、ひとえに日頃よりご支援ご協力を賜っている個人様・団体様・企業様のおかげです。この場を借りて心より御礼申し上げます。

私たち13期は特に対話を介した粘り強い関係構築に主眼をおいて、一年間活動して参りました。カンファレンス設計に際して「絆」を重んじたのは、私たちが活動を通して身につけた自他関係への視点が発露した結果ですが、これについては後掲のカンファレンス総括に譲りたいと思います。全く異なる文化背景のもとで育ち一見すると相容れない価値観をもつハーバード生や、単に学生生活を送っているだけでは関わることの少ない社会的立場のある方々はもちろん、密なコミュニケーションをとらずにはいられない同期のメンバーと真摯に向き合ったことは、なによりも得難い糧となって確かに私たちに蓄積されているように感じます。

昨年五月に結成された13期が最も大きな試練に直面したのは八月のアプリケーション作成の時かもしれません。日夜いつ終わるとも知れない企画立案やロジスティクスの検討により心身ともに疲弊する中、私たちはふと立ち止まりました。共に作業にいそしむ同期との対話の決定的な欠如が自覚されたからです。このことは後の活動にも大きな影響を与え、他者を理解する（あるいはできない）ことや異質さを越境することの本質的な難しさと向き合うきっかけにもなりました。結果として、東京カンファレンス2019の最中に、瑣末にも思えるような生活環境や行動時間についての運営者-参加者の間の対話を粘り強く続けられたのは、この経験があってのことと言えるでしょう。

私たちは多くの方々に叱咤激励を頂きつつ、なんとか一年を走り抜けたばかりです。過ぎた時間を単なる思い出として消費するのではなく、私たちひいて私たちの大切な人々のよりよい未来のために余すところなく生かしていかなければなりません。各人各様の学びを、ご支援ご協力を頂いた皆様に胸を張って還元できるよう、今後とも身を引き締めて益々精進して参りたいと思います。

改めまして、今後とも折に触れて反芻しなければならないような意義深い一年を過ごす機会を提供してくださった関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

HCAP東京大学運営委員会　13期代表
中本　憲利

1.HCAPとは

HCAP（Harvard College in Asia Program）は、ハーバード大学に本部を、アジアの九つの国と地域のトップレベル大学に支部を置く、学生主体の団体です。学生間でアメリカとアジア各国 の架け橋となるような関係を構築するため、学術・文化・交流を軸に学生会議や交流活動を行う「カンファレンス」 を開催しております。

その日本支部である HCAP東京大学運営委員会は、東京大学公認の学生団体です。「ハーバードカンファレンス」（毎年一月にハーバード大学にて行われるカンファレンス）への参加と「HCAP 東京カンファレンス」（毎年三月に日本にて行われるカンファレンス）の主催を二本柱として活動しております。

2.HCAP 東京カンファレンス2019 協賛・協力（敬称略）

協賛

株式会社ベネッセコーポレーション　Route H
株式会社ベネッセコーポレーション　Global Learning Center
東大駒場友の会

後援

外務省

顧問

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部　教授　松田恭幸

企画協力

「東大生xハーバード生交流」企画
東大駒場友の会
「日米『お笑い』文化比較」企画
株式会社ワタナベエンターテインメント　石井てる美
バイリンガルコメディアン　Kilara Sen (formerly: Kaori)
「茶道デモンストレーション」企画
公益財団法人　国際茶道文化協会　増山雄一
公益財団法人　国際茶道文化協会　岩井蓉子
公益財団法人　国際茶道文化協会　井出孝子
公益財団法人　国際茶道文化協会　スタッフの皆さま

「高校生交流」企画

株式会社ベネッセコーポレーション

英語・グローバル事業開発部　グローバルラーニング課

Route H 責任者 尾澤章浩

「アイデアソン」企画

東大発イノベーション教育プログラムi.school　根本紘志

「英語教育」企画

高校生の皆さま

その他ご協力

日本経済新聞社　編集局　国際アジア部　シニア・エディター　森下薫

Vital Japan　代表　小田康之

東京大学渉外本部　社会連携本部　渉外部門　シニア・ディレクター　佐藤淳

東京大学渉外本部　社会連携部　渉外活動支援課　総務チーム　係長　池田徹

東京大学教養学部等学生支援課学生支援係　後藤洋輔

国立オリンピック記念青少年総合センター

京都国際マンガミュージアム

こまばサロン　暖炉　西村いずみ

3.プログラム詳細報告

3-1.貿易ゲーム

【日時】
3月17日（日）10:00-14:00

【場所】
東京大学駒場キャンパス内

【企画目的】
・現代経済をモデリングしたゲームの中で資本主義社会の全体像を体感する。
・資本主義社会における格差を、ゲームという形で体感する。

【企画内容】
紙を資源として、配布された文房具を使って規格に基づく製品を作り、制限時間内に一番多くの金額を稼いだチーム（国）を優勝とする。これに加えていくつかの単純なルールを元に、参加者を6チームに分けてゲームを開始した。6チームはそれぞれ与えられる資源や文房具の数が異なり、貿易で必要なものを揃えつつゲームを有利に進めることが求められた。

【総括】
当企画はお金を稼ぐ、ということに関して東大生とハーバード大の学生が短時間で集中し、そこで起きる頭脳戦を経て一定の気づきを得てほしい、というものであった。その気づきは格差の生じ方、そして格差を挽回することの難しさといった資本主義社会の現状に関するものである。また、各個人にはこの頭脳戦において交渉や目標設定に到るまでの道筋といった高度な意思決定を経験し、その部分に関する学びも得てほしいという意図があった。この企画は結果的にそれらの意図を大きく達成する高度なレベルのものとなり、参加者からは資本主義社会の現状に関する考察、感想などを聞くことができ、皆が考察を深めた。
また当企画は今回の東京カンファレンスにおける最初の企画であり、アイスブレイク的な役割も担った。実際にチームを組んで勝つために戦う、そしてそのために構成員の間に十分な量の会話が生まれるのは必然であり、またこのゲームの単純かつ結果が数値として完全に可視化されるという性質から、最初の企画としては中々の熱量を伴った企画となった。

【文責】HCAP東京大学運営委員会13期　城戸一稀

3-2.東大生・ハーバード生交流企画

【日時】
3月17日(日)　18:00-21:00

【場所】
イタリアントマトjr駒場店

【参加者】
HCAP Tokyoの東大生14名

その他東大生21名

ハーバード生12名

【企画目的】
東大生とハーバード生の交流。

【企画内容】
　東大生とハーバード生が約２時間の間食事を交えて、「自分にとって大学が持つ意義」をはじめとする様々な話題について語り合う。

【総括】
東大生とハーバード生が、学び合い、共に成長するという関係を築くことはHCAPの活動目的の１つであり、これまでの活動を支えてきたモチベーションの一つであった。「君の大学は？」という簡単な問いから発して、東大生、ハーバード生が大学という場所をどう捉えているかを率直に話し合うことで大学の意義を見つめ直した。そのことが、互いの今後の学生生活に良い影響を及ぼすことを期待し、弊団体は本企画を実施した。この活動を通じて、自分の大学生活の意義をもう一度考え直すことができ、そこから発展して違う文化背景に根ざしているお互いの価値観・考え方を共有することでお互いを刺激し合う機会となった。

【文責】HCAP東京大学運営委員会13期　文誠彬

↑総勢40名超による交流会となりました！

3-3.たこ焼きパーティー

【日時】
2019年3月18日(月)　9:00-12:00

【場所】
駒場サロン

【企画目的】
日本の代表的な料理の一つである

たこ焼きをハーバード生と一緒に作り、

日本の食文化を体験してもらう。

【企画内容】
たこ焼きの調理・試食。

【総括】
たこ焼きは日本を代表する食べ物の一つであり、大勢の人数で簡単に作ることができる食べ物である。普段はたこ焼きを作る機会のないハーバード生と一緒にたこ焼きを作ることで彼らの日本食への理解を深めてもらい、また、一緒に力を合わせてたこ焼きを作ることでより親睦を深める機会を図った。たこ焼きに入る材料としては定番のタコ以外にも、チョコレート、わさび、納豆などを入れてロシアンルーレットゲームを実施し、みんなで企画を楽しむことができた。

【文責】HCAP東京大学運営委員会13期　文誠彬

3-4.お笑い企画

【日時】
2019年3月18日(月) 14:00-18:00

【場所】
国立オリンピック記念青少年総合センター　センター棟　503号室

【参加者】
HCAP Tokyoの東大生14名、ハーバード生12名、お笑い芸人 石井てる美様、スタンダップ・コメディアン　Kilara Sen様

【企画目的】
日米のお笑いスタイルの違いをベースとして、そのスタイルの差を育むに至った両国の文化的背景の違いについて知る。

【企画内容】
企画者から企画内容についてのブリーフィングを行ったあと、ゲストとしてお呼びした石井てる美様とKilara Sen様に日米それぞれのスタイルのお笑いを披露して頂いた。その後、YouTubeで両国の典型的なスタイルとも言えるスタイルのお笑い動画を鑑賞し、お二人のパフォーマンスと併せて日米のお笑いの共通点や相違点について全員でのディスカッションを行った。続いてお二人からネタ作りのアドバイスを頂いてから東大生とハーバード生がペアを組んで1分程度のネタ作りに挑戦した。最終的にそれぞれのペアが全員の前でネタ見せを行い、投票で面白かったペアを決めた。

【総括】
　プロのコメディアンのネタを間近で見るという経験は滅多に出来るものではなく、東大生、ハーバード生ともにゲストのお二方のパフォーマンスに興味津々であった。また、ディスカッションに関しても流石は東大生とハーバード生、といったところでかなり白熱した。具体的に一部を抜き出すと、「日本のお笑いは非現実的なものを描くのに対してアメリカでは現実に即したものをネタとして扱う」という意見や「make sense」をアメリカ側が大切にしているのに対して、日本側では「doesn't make sense」を大切にしている、と考える意見など多種多様な鋭い意見が飛び交い、大変充実した時間であった。
ネタ作りに関しては時間が限られていること、ペアを完全に運任せで決めてしまったこともあり、もし何も思いつかないまま時間だけが過ぎてしまったらどうしようかと企画者としては不安に感じる部分もあったが、その心配は杞憂に終わり、どのペアもネタ作りの時間が始まるや否やディスカッションを始めていたのが印象的だった。ネタについてもどのペアを取ってもクオリティが高く、ここでも東大生とハーバード生の底力を見せつけられる形となった。企画終了後、ハーバード生に話を聞いてみると、ゲストのお二方から頂いたネタ作りのアドバイスが非常に参考になったということだった。これを踏まえると、パフォーマンスという一見学問とはかけ離れた領域の分野であっても広い意味での「教育」が有用であるということが分かった。
　最後になりますが、本企画の開催に多大なるご協力をしてくださった石井てる美様、Kilara Sen様には改めてこの場を借りて感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございました。

【文責】HCAP東京大学運営委員会13期　宮川拓己

3-5.茶道デモンストレーション

【日時】
3月19日（火）　10:00-11:30

【場所】
茶道裏千家東京茶道会館

【企画目的】
・わが国を代表する精神文化である茶道を、多様なバックグラウンドをもつハーバード大学の学生にとって身近に感じてもらうことにより、わが国が未来に諸外国と友好的な関係を取り結ぶための布石とするため。
・通り一遍の観光ではなし得ないような奥深い文化体験をするため。

【企画内容】

デモンストレーションはすべて英語で行われた。

まず、東大生とハーバード生総勢26名が二十畳ほどの茶室に坐し、講師の方から茶道の歴史とその精神について十五分程度のご講話をいただいた。ご講話では、裏千家茶道の家祖である千利休が、英国の劇作家シェイクスピアと同時代にわび茶を完成に導いた人物として紹介された。その後、亭主が客二名に呈茶する想定での点前（てまえ；お茶を点てる所作のこと）のデモンストレーションを三〇分ほど見学した。休憩をはさみ、実際に和菓子と抹茶を頂いた。また、希望者は自ら茶筅を手に取って抹茶を点てる体験も行った。

【総括】

講師の方のご講話では、禅宗の発展と分かち難く結びついた茶道の歴史とその精神について斬新な視点から詳解が施され、ハーバード生だけでなく東大生も身を乗り出して聞いていた。また、デモンストレーションでは、洗練された一挙手一投足を講師の方の英語解説を聴きつつ、一同まばたきを惜しんで見守った。茶室に掲げられた「和敬清寂」のことばが点前を通して体現されている様子には、悠久の歴史の中で形作られた伝統の力強さを見た。

最初は固い面持ちだったハーバード生も、本格的な和菓子や点てて頂いた抹茶を味わいつつ、徐々に緊張がほぐれてきたようだった。お互いに抹茶を点て合う中で自然と交流が生まれ、カンファレンス序盤の企画としては成功だったように思う。

末筆ながら、本企画実施に際し多大なるご協力を頂いた公益財団法人国際茶道文化協会の皆さまに感謝の意を表したい。

【文責】　HCAP東京大学運営委員会13期　中本憲利

3-6.高校生交流企画

【日時】
3月19日(火)14:00-18:00

【場所】
ハロー貸し会議室上野駅前

RoomA および　浅草寺周辺

【参加者】
HCAP Tokyoの東大生14名

ハーバード生12名

高校生約50名

【企画目的】
・高校生がより良い進路選択をできるようにするとともに、将来の展望を考えるきっかけを提供する。
・大学生(HCAP所属の東大生・ハーバード生)も自らの進路選択を振り返り、いまある自分と将来の自分を見つめ直すきっかけを提供する。

【企画内容】
基本的に使用言語は英語で、またどのパートも約10名程度で構成された7つのグループに分かれて行われた。
1.アイスブレイク
アイスブレイクとして互いの価値観の度合いを数字で表し、近い数字の人を探す「価値観ゲーム」を楽しんだ。
2.プレゼンテーションとパネルディスカッション
HCAP Tokyoの2人とハーバード生ら3人、計5人が自らの所属する大学の面白い授業や授業外の生活、教育システムといったテーマについてプレゼンを行ったのちに、パネルディスカッションを行った。
3.グループディスカッション1
テーマは「進学先の決め方」。どのような経緯・理由で今の大学を選択したのか、またはするべきか、といったテーマを軸に意見を交わした。

4.グループディスカッション2
テーマは「大学生活のこれから」。キャリア形成という観点から大学を選択する際に役立つと思われるアドバイスをしたり、これからの社会の変化に合わせてどういった人物になるべきかなどを議論した。
5.自由歓談
グループの枠組みを超えて、皆が自由に歓談できる時間。事前配布のドリームシートで気になったり，プレゼンターをした特定の東大生・ハーバード生に直接話しかける高校生参加者も多かった。
6.浅草観光
今年初の試みとして，グループごとの浅草観光を行なった。各グループの高校生とハーバード生が文化体験をしつつ、よりフランクに仲を深めるための契機としてのものであった。

【総括】
全体を通じて高校生の大学生活への興味というものがひしひしと伝わってくる企画であった。ハーバード生や東大生に質問を投げかける高校生たちからは、自分の将来に対する意欲や世界に対する視線というものが十分すぎるほどに伝わってきた。ハーバード生としても高校生の熱意を感じて、自身の経験と知識を可能な限り提供しようとしてくれている姿も見受けられた。
また我々HCAP Tokyo所属の参加者も、近年増えつつある海外大学進学希望者と議論をすることで、 留学を含む自らの将来に対する姿勢から、さらには我々の大学の実情といった部分までも再確認できる良い機会となったはずである。
本企画に参加していただいた高校生全員が、自分の納得のいく進路選択を実現することを願うとともに、本企画の開催に多大なるご協力・ご支援をしてくださったRoute H様やGLC様には感謝の意を申し上げます。

【文責】
HCAP東京大学運営委員会13期　森一真

3-7.アイデアソン企画

【日時】

3月20日（水）10:00-14:00

【場所】

深川東京モダン館多目的スペース

【参加者】

HCAP Tokyoの東大生14名、ハーバード生12名、 i.school 根本紘志様

【企画目的】

・アイデアソンを通して「デザイン思考」を体験してもらう。

・お互いの人生エピソードの共有を通して参加者の相互理解を深める。

【企画内容】

イノベーション教育プログラム「i.school」の根本紘志様のご指導をいただきつつ、「A New Way of Sharing Experiences」をテーマにしてアイデアソンを実施した。企画当日の前に、参加者各位に自分のシェアしたいエピソードを準備してもらった。アイデアソンの最初のステップとして3-4人のグループ内でエピソードを共有してもらい、本人の意思や情報の伝達に関してお互いのエピソードを掘り下げてもらった。その後、数個のガジェットをビデオ形式で紹介し、掛け算ストーミングの方法でエピソード共有への導入のアイデア出しを行った。各グループで出されたアイデアを１つに絞ってピッチプレゼンをしてもらい、投票で優勝を決めた。最後に、根本様から本企画とデザイン思考との関係をまとめていただいた。

【総括】

当企画は、イノベーション創出のプロセスであるデザイン思考を参加者に体験してもらいつつ、互いの人生エピソードの共有を通して相互理解を深めることを目標とした。

「デザイン思考（Design Thinking）」とは、プロダクト開発やイノベーションの創造を目的とした、ひとつのアプローチである。2005年にスタンフォード大学にd.schoolが創設され、Business Week誌が“Design Thinking”と題した特集号を発行したことでデザイン思考一気に知られるようになった。デザイン思考は「ヒューマン・セントリック」「ユーザー視点」「潜在的価値の発掘」といった概念を包含し、「イノベーションを実現する方法論を体系化したマニュアル」と捉えられている。

企画当日は、連日の疲労にもかかわらずアイデアソン企画においてハーバード生、東大生が活発に議論を交わした。アイデア創出の段階で各グループがポストイットを用いて数十個のアイデアを出し合い、その中から最も魅力的なものを選んで発表を行った。短い企画内で出されたアイデアは恐らくそのビジネス価値が高くはないと思われるが、デザイン思考に触れる機会が得られ、参加メンバーが将来そのノーハウを生かして新たなイノベーションの創出を挑むことが期待できる。

i.schoolは2009年に東京大学で始まったイノベーション教育プログラムであり、このプログラムでは社会的課題を解決するアイデア創出法に焦点を当て、人間中心イノベーションを体系的に学べる。当企画の準備段階からi.schoolの根元紘志様のご指導をいただきながらアイデアソンの進行計画を立て、企画の実施に至りました。企画準備にあたり多大なるお力添えをいただき、企画内でご登壇くださったi.schoolの根元紘志様に感謝の意を申し上げたい。

【文責】HCAP東京大学運営委員会13期　韓東学

3-8. 英語教育企画

【日時】
2019年3月19日 9:00-12:00

【場所】
国立オリンピック記念青少年

総合センター センター棟108号室

【参加者】
HCAP Tokyoの東大生14名

ハーバード生12名

現役高校生（高校1年生）10名

【企画目的】
・日本の英語教育における問題点を洗い出し、分析した上でどのように改善していくべきかを考える機会を作る。
・ティーチングを実際に体験する。
・言語教育、特に第二言語としての英語教育の難しさを実感した上で、「英語は話せて当然」という考え方を見直す機会を作る。

【企画内容】
企画は基本的に英語で行われ、どのパートも東大生、ハーバード生、高校生を混ぜた６、７人程度のグループに分かれて行われた。
1. アイスブレイク
 全員で、「バースデーライン」および「長文伝言ゲーム」の二つのゲームを行い、参加者全員がお互いと打ち解ける環境を作った。
2. 日本における英語教育の現状についてのプレゼンテーション
 当企画の企画者である角谷より、現在の日本の英語教育の様子、及びよく挙げられる問題点について紹介した。
3. レッスンプラン作成
 現在の英語教育の問題点を共有した上で、各グループに協力して「自己紹介」または「道案内」のテーマどちらかについての10分間の授業を計画してもらった。当日参加した高校生には、実際使っている教科書を持参してもらい、参考にしてもらった。授業の対象は、中学1年生とした。

4. レッスン発表会
作成したレッスンを、他のグループに実際に「教える」という形で発表した。動画見せるグループもあれば、ジェスチャーだけで教えるグループ、オンライン英会話サービスのシミュレーションを行うグループなどもあった。片方のグループの発表が終わったら、逆転しもう片方のグループが発表した。
5. フィードバック
自分のグループのレッスンプランに対して、「教えられた」グループからのフィードバックがあった。学校環境内での実現可能性、プラクティカリティ、面白さなどのポイントについてお互いに指摘をした。

【総括】
当企画は、企画者である角谷が個人的に感じていた英語企画に対する違和感をきっかけとして作られたものである。
しかし、目的はただただ日本の英語教育を一方的に批判するだけではなく、実際にどのような方法をとれば解決できるものなのかをしっかり考え、その上で言語教育の難しさを認識することがポイントであった。
企画者含め、ただ無責任に批判の声をあげる人は多い。が、多くの場合、実際なぜ英語を教えるのが難しいのかを知らずに言ってしまっているものであり、ある意味非常に無責任な行為とも言える。やはり、一度やってみなければ何も分からない、という考えの元で当企画が生まれた。
がしかし、レッスンプランの作成がスムーズに進むかといえば、実際どのグループもかなり苦戦していた。実は、簡単にできるものではないというところに、当企画の本当の意図が隠れていると言っても過言ではないだろう。
グローバル化が騒がれるこの時代において、自らの母国語はもちろん、英語も英米圏でコミュニケーションを取れる程度には使えるのが当然とされている。
実際は「英語が使えるのは当然だ」と言えるほど、英語教育は簡単なものではなく、考慮しなくてはならないことが想像以上にある。もちろんより良い英語教育の形を目指すことも大事だが、その難しさを十分に理解せずに当然のように全世界の人が英語を使える、と思い続けるのは、多国間コミュニケーションに支障をきたす可能性も十分にある。円滑で公平なコミュニケーションを心がけるのならば、英語習得の難しさを理解する努力をするのは当然なことであろう。
色々と試行錯誤しながらクリエイティブなレッスンを考える参加者を見ていた限り、その困難さを肌で感じ取る良い機会になったのでは、と感じている。

【文責】HCAP東京大学運営委員会13期　角谷透子

3-9.漫画企画

【日時】
2019年3月23日16:00-18:00

【場所】
京都国際マンガミュージアム

【企画目的】
漫画の歴史、変遷と現在に至る日本におけるサブカルチャーの重要性や社会への影響について知ってもらう。

【企画内容】
ミュージアム内に英語表記つきの歴史や変遷に関する展示があり、外国語翻訳の漫画も置いてあり、館内は私語を控える環境であるため基本的に個人が展示を観覧する形式となった。

【総括】
　当企画はハーバード生も東大生も旅疲れが募りつつある最終日の企画であったが、結果としては個々人がゆっくりと展示を見つつ楽しむことができた。それぞれが退館する際に笑っていたのが印象的であった。展示については内容が非常に興味深いものであり、ハーバード生も限られた時間ではあったもののじっくりとパネルを読んでいた。
　また、ミュージアムを訪問する前の会話からもハーバード生の漫画や現代のサブカルチャーへの関心は感じられていたのだが、ミュージアムに関する事前説明や漫画の社会での影響力の強さなど表面的なサブカルチャー消費に止まらない話まで深めることもできた。ハーバード生は歴史や社会での相対的な漫画のあり方などアカデミックに近い話についての関心が非常に強く、ミュージアムで古い漫画の現物を目にすることで日本の特殊なサブカルチャーの占める比較的大きな役割について彼らの知的好奇心に沿った良い経験ができたのではないかと考えられる。
　また、東大生である私の推測では測れないような現実的な漫画の歴史について知ることができた。内容は光と陰、というバランスの取れた両側面というよりは楽観的なものであったので陰の部分についても自分の知るところ、または教授など専門家の研究などからわかっていることを余すことなく全員に共有する時間があると尚良かったかと思われる。
　しかし総じて、日本文化の中でも特に外国環境でも目に触れることの多い漫画についてハーバード生が知識を得られたこと、歴史も含めより身近に感じてもらえたこと、ただの消費コンテンツではない日本に根付く文化であると知ってもらえたことを鑑みると非常に貴重な時間となった。

【文責】HCAP東京大学運営委員会13期　井上史菜

4.HCAP東京カンファレンス2019　総括

国際化という言葉を聞かない日がない近頃、「国際交流」の機会は数え切れないほどあるともいえるでしょう。東京大学でも、近年では「国際系」と称される学生団体・サークルの数が急増しているのが現状です。

HCAP Tokyoは、設立から数えて今年で十三年目を迎えます。特に何かの節目というわけではありません。しかし、十年を超える長きにわたって活動してきた組織として、どのような価値を継承していきたいのか、改めて考えさせられるような一年でした。そうした中で、今年度、私たち13期は（ある意味において非常に「日本的」な発想である）「絆」を大事にすることを目標に掲げて一年間活動をして参りました。

東大生であれ、ハーバード生であれ、同じ時代に生きる同じ「大学生」であることに変わりはありません。九日間のカンファレンスは普通ならば知り合うことのできない海外の大学生と友人になれる、貴重な機会です。だからこそ、あらゆるレッテルを捨て去り、とことん互いと向き合うべき。親友になりたいと、心の底から思って臨むべき。この想いを元に、私たちは企画書の冒頭にハーバード生に宛てて「手紙」を書きました。それは次のような文章から始まります。

“Dear Harvard delegates,
Catching up with each other for hours, even after years of not talking, over a single cup of coffee that sits forgotten in the corner of the table -- if we can imagine relationships like this, ten, twenty years into the future, to us there is no greater success...”
（「親愛なるハーバードの友人たちへ
テーブルの端っこに置かれたコーヒーが冷めてしまっていることにさえ気付かないほど、夢中に話し込んでしまう。カンファレンスを経た私たちが、数十年が経ってもこのような関係でいられることが想像できたならば、これ以上の成功はないだろう。」）

このような思いに基づき、今年度のカンファレンスは、濃密なコミュニケーションが成立する環境を作ることを念頭に置いて計画しました。

「お笑い」という文化的側面からコミュニケーション・スタイルの違いについて実践しつつ考察し、英語教育を通して現場でどのようなコミュニケーションがなされているのかについての議論を交わすなど……。

このようなテーマを設定したことで企画を何度も練り直さなくてはならなくなったり、時にはHCAP Tokyoメンバー間のコミュニケーションこそが試されたような瞬間も多々ありましたが、今となってみればそれなくしては無意味な一年だったのではないかと思います。

当日全てが計画通り行ったかといえば、むしろ予想外の出来事の方が多かったと言っても過言ではない九日間でした。ただ、ハーバード生とも丁寧に対話を重ね、互いに提案を出し合いながら何かを完成させていく経験はかけがえのないものでした。

当初はお互いと会話すらままならなかった仲だったのにも関わらず、最終的には私たち東大生だけではなく26人が揃ってやっと出来上がったカンファレンスだと実感することができました。このことは、東大生・ハーバード生全員にとって今後の人生を歩んでいく中で必ず糧となる思い出になっていくことでしょう。

最後にはなりますが、このような忘れがたい時間を過ごすことができたのは、様々な形でご支援ご協力いただいた皆様のおかげです。この場を借りて、改めて厚く御礼申し上げます。

この一年がメンバー一人ひとりにとって具体的にどのような意味を持つようになるのかは知りようがありません。が、何かしらの簡単には語りきれないほど大事な意味であろうということは、断言したいと思います。

HCAP東京大学運営委員会　13期副代表
角谷　透子

5.HCAP 東京カンファレンス 2019 会計報告

（2020年1月7日時点）

支出の部

項目	金額（円）
宿泊費	387,902
食費	455,011
交通費	444,577
企画費	242,124
雑費	60,117
新入生採用活動費	173,190
計	1,762,921

収入の部

項目		金額（円）
寄付金	ベネッセコーポレーション	1,400,000
寄付金	東大駒場友の会	100,800
繰越金		594,523
計		2,095,323

収支差額の332,402円は次年度の東京カンファレンスに引き継ぎます。

以上

HCAP TOKYO